

大石路花について

——森鷗外における虚無(一)——

磯 貝 英 夫

一

森鷗外の「青年」の主人公小泉純一が、上京して最初に訪れるのは、作家大石狷太郎路花であるが、その場面(一)において、読者に伝えられる大石についての情報は次のようなものである。

大石は、独身で、擬西洋造りの下宿屋に住んでいる。十時ごろに起きて、朝昼兼ねた食事をとる。それから勤めに
出、二時か三時ごろに帰り、そのあと一日寝ていたりする。
勤務先は東京新聞社で、文学欄(附録)を担当し、また、
その新聞に小説を連載している。その附録で批評対象としてとりあげるのは、大石自身を含む二、三の作家に限られている。かれは、あらゆる新聞雑誌に肖像の載る流行作家で、無愛想さで有名である。金力を持ち、下宿料はきちん
と払い、女中へのつけ届けは人に倍する。しかし、着物などは質素で、洋服以外の時は、寝る時も、外出する時も、

一つの着物で通している。

以上がその情報の全部で、この場面の大石の応待の細部叙述は、そういう大石のイメージの固定化のために費やされている。かれは、まず、純一よりも先に訪れた、花袋の「蒲団」の主人公と同名の近藤時雄という雑誌記者の、現代思想に関する談話筆記の要求に対して、その記者の語る自然主義的観念をことごとく疑問形として投げ返すことで、それをはぐらかしてしまふ。しかも、大石の意識では、そんなふうにご記者に應對してしまったこと自体、次いであらわれた純一の無垢な目つきへの好感にさそいだされたタツナのゆるみであった。そのあと、かれは、遠慮する純一を叱りつけて昼飯を食わせ、しかし、紹介状を聞きもせず、用件も聞かず、純一を残したまま、あつというまに、出かけてしまふ。

世間的な慣習をいっさい無化した、気ままな自由人のイメージがここに確定する。純一の二度目の大石訪問(二)

は、このイメージの補足であり、大石談話の記述は、間接的で、かつ、はなはだ簡略である。大石が、その折純一に言い聞かせたのは、詩人はなりたくてなれるものではなく、修業のしようもない、資産があるのは結構だが、生活難がないと、刺激がなくて、成功しにくいかもしれないというだけのことで、このしごく無愛想で、しかし真率なことは、大石の住んでいる次元をよく示している。

ここで注目されることは、この一、二章における大石の立言が、すべて疑問形と否定形によってなされているという点である。多分それをふまえて、純一は、やがて、次のような感想を持って大石から離れてゆくことになる。

先頃大石に逢つた時を顧みれば、彼を大きく思つて、自分を小さく思つたに違ひない。併し彼が何物かを有してゐるとは思はない。自分も相応に因襲や前極めを破壊してゐる積りでゐたのに、大石に逢つて見れば、彼の破壊は自分なんぞより周到であるらしい。自分も今一洗濯したら、あんな態度になられるだらうと思つた。然るに今日拊石の演説を聞いてゐるうちに、彼が何物かを有してゐるのが、髣髴として認められた様である。その何物かが気になる。(八)

純一がこんな感想を持ったのは、むろん、平田拊石が、その演説のなかで、習慣の索をひきちぎったイブセンの求

めた理想に言及したことによる。しかし、くちばしの黄色い坊ちゃん純一が、因襲破壊を自負するおかしさは不問にするとしても、以上のようなわずかな情報とイメージだけをもとにして、こんなふうな性急に結論を出すことも、客観的に言えばおかしい。これだけの材料で、大石・拊石の否定および希求のレベルがわかるはずもなく、ことばに簡単に酔うのは、やはり単細胞の少年だなど、醒めてしまいかねない。

そのおそれは、むろん、作者闕外も感じていたはずで、だから、かれは、そこを、ある策略をつかつて切り抜けようとするのである。その策略とは、大石および拊石の奥に実在の人物をちらつかせ、その実在人物のリアリティによって、各登場人物の像をおぎなうという方法である。拊石は、命名自体によって、ただちに漱石を連想させるようにつけられている。読者は、拊名の演説に、すでに公表されている漱石の「文芸の哲学的基礎」などの講演速記を思い浮かべ、さらに、漱石の人格と思想のトータルなイメージをもってそれを補足する。そうなれば、拊石の演説は簡単でもかまわないのである。

大石路花は、名の類同するところがなく、多少の事情通であれば、ただちに正宗白鳥を思い浮かべる。白鳥の名をもじらなかつたのは、多分、否定的なとりあげにかかわ

る遠慮であつたらうが、鷗外は、あきらかに、白鳥を連想させることを意図している。わざわざ、鷗村（鷗外）と拊石（漱石）のあいだにはさんで路花を出して、お分かりでしようと言わんばかりである。この当時、独身で、新聞社につとめ、新聞に小説を連載しているのは、白鳥だけである。「青年」の書きはじめられた当時、白鳥は、読売新聞の記者であり、日曜附録を主宰して、辛辣な批評の筆をふるい、明治四十二年九月から十一月までは、その新聞に小説「落日」を連載している。四十二、三年には、老婢をやとつて、一家を構えているが、四十一年九月までは、森川町で下宿生活をしていた。（ちなみに、「青年」の発表は、四十三年三月からであり、作品内時間は、四十二年十月から翌年一月までである）それに、大石の、にべもない、無愛想な口の利きかたは、他の自然主義のだれよりも、白鳥の文章のニュアンスをよく写している。

当時におけるポピュラーな文学ジャーナリズム地図は、白鳥の拠る読売新聞と、漱石の拠る朝日新聞とに、大きく両分されており、鷗外の「青年」の基本構想の一つは、この両者をならべて、それを超える思想的立場を示すところにあつたと言つてよい。そのためには、白鳥と漱石のパロディカルな模像をつくり、それをまたいでみせればよい。鷗外はそう計画し、その策略はひとまず成功した。

だが、大石自体の叙述は全体に外面的で、あれだけでその内面を捕捉することはむずかしく、まして、それで白鳥的なものを卒業ということになれば、文句が出るのが当然であらう。白鳥自身はやがて次のように言う。

『青年』のはじめに出てゐる下宿屋住みの小説家大石某は、私を雛型にしたのだと、解説者が云つてゐるが、早くから私はそれを耳にしてゐた。そしてこれは小山内薫が鷗外に話したのであらうと推察してゐた。今説むと、あの頃の私らしい青年が、何となく出てゐるやうでもある。しかし、無論間違ひだらけだ。（中略）鷗外も傍人の云つた人の噂をそのまま受入れて、真実のつもりで書いたとすると、大たはけである。自然主義作家は誰でもこんな風だらうと、通俗的に断定したのであらう。

〔「説書雜記」昭26・1〜12『中央公論』〕

白鳥が具体的に反駁しているのは、自分は元来早起きで、十時にならなければ起きないなどということはないということと、未知の訪問客に対してあんな議論をすること、絶対にないということとの二点である。ただ、下宿料をきちんと払うということと、着物が質素だということだけは、肯定している。

鷗外は名ざしているわけではないので、この白鳥の批判

はむろん無効だが、通俗的な意味でのだらしない、またゆるんだイメージづくりへの白鳥の反発感情はよくわかる。たしかに、このイメージづくりの次元は低い。

ただ、鷗外のこういう大石イメージは、あるいは、白鳥が明治四十二年八月の『文章世界』に発表した「一週間の日記」から得られたところがあるのではないかと、私は思う。抜き書きすると、そこには次のような記述がある。

六月二日 帰宅後入浴。夕方までゴロ寝をして、新着の早稲田文学と無名通信とを読む。

三日 日曜附録へ出すべき「今月の雑誌」を書いたが、こんな事を書くのは厭でならぬ。十時頃出社、午後三時頃帰宅、昼寝、読みもせず書きもせず考へもせず、

四日 今日はお社せず、午後は来客もなく無為を楽しむ。

八日 熊本の大臣といふ青年より切手封入の手紙来る。予の作の愛読者なりとて門下生たらんことを望むとの事。予も有名になつてよりかゝる手紙に接し又は来訪を辱うする事が多いが、返事を出したり出さなかつたり、冷淡至極であるのが例だ。(中略) セル一枚でゴロ寝してると気が持たない。朝の晴れが午後に曇り、今日も昼寝に相応しい。

十時起床の件はやはり出てこないが、これらの諸文から鷗外の大石イメージまでは一歩だと言つてよいだろう。鷗外は、白鳥のこういう生き様、あるいはこういうことをすらすらと書く精神に、強い関心を持っていたようである。

しかし、結局、純一に、「彼が何物かを有してゐると思はない。」と思わせて、それを突き放してしまふ。むろん虚構のうえのことであるが、虚構自体としても、この突き放しかたは、すでに指摘したように、すこし性急である。大石の内部に測鉛をおろすころみはまったくなされていないのである。まして、白鳥という新しい精神体をこれだけで見切るといふのでは、あまりにお手軽だと言わざるをえない。

二

そのことが気になったのか、鷗外は、物語が大石を外れてすでに遠い第十三章になって、もう一度、純一をして大石を訪ねさせる。

大石は、そこで、執筆中の作品の糸筋を整理するといつたふりに、目下の自分の境遇を他人事のように純一に話つてきかせる。東京新聞の社主が交替し、新社主は、自分の新聞の自然主義的色調を嫌い、一流の大学教授連その他を執筆陣に招いて、アカデミックな華族的新聞をつくらうと

企てている。そうすると、自分は車の第三輪になる、と言うのである。

それを聞いて、純一は考える。東京新聞の論調は、党派的ではあったが、とにかく、主張があり、特色があった。かりにそれを社会を茶毒するものと認めたとしても、新聞をアカデミックにしてその弊を除こうとするのは、反動であり、抑圧である。路花は当然不平なはずである。「この不平は赫とした赤い怒りとなつて現れるか、さうでないなら、緑青のやうな皮肉になつて現れねばならない。路花はどんな物を書くだらうか。いやいや。矢張りいつもの何物に出逢つても屈折しないラヂウム光線のやうな文章で、何もかも自分とは交渉のないやうに書いて、『ああ、わたくしの頭にはなんにもない』なんぞと云ふだらう。」

この挿話は、明治四十二年十二月における、読売新聞社長本野盛草の死去を受けて、翌年三月、子の一郎が社長（社長ではない）になつたのに伴つた紙面改革の動きをモデルにしており、ここでは、鷗外は、もはやはばかりなく、その時の白鳥の動静を大石のこととして写しだしている。白鳥は、結局、この改革のあおりを受けて、四十三年六月に、七年間の新聞社勤務を閉じることを余儀なくされるのだが、すでに、平岡敏雄氏が指摘しているように、『日露戦後文学の研究』上巻)、鷗外の記述は、白鳥がこの事件を作

品化した小説「動搖」(明43・4『中央公論』)に拠っている。純一が目撃した大石執筆中の小説はすなわちこの「動搖」という含みで、実際、この作品の結末は、純一がここで予想したのとほぼ同じく、「もう何も無い、何も無い。」という主人公「私」の感慨で閉じられているのである。

白鳥は、のちのち、この事件を何度も回想しているが、鷗外の反応については、次のような書きかたをしている。

私の退社といふ事なんか、天下の大勢に何の關係もない事かと思つてゐたら、後年森鷗外の書翰集を偶然通読した時、彼が京都の上田敏に寄せた音信のうち、私が本野にきらはれて読売から追出されたことが書かれてあつた。彼等は日本の自然主義及び自然主義者に反感を抱いてゐたため、私が新聞の芸芸欄主任の地位を失つたことをも、文壇に於ける一快事として心に留めてゐたのであらう。愚なことである。

〔東京の五十年〕(昭21・11)23・1『新生』『花』

しかし、実際の鷗外の敏あて手紙(明43・3・26)は、「よみうりは初め本野氏が自然派機関云々ときよて改革をおもひ立ち一旦は正宗君を全く罷むることとなり相馬君など中にはいりて取り止め日隴附録も半分は正宗半分は新記者の担任になるならんとの噂を聞候いかなるべきか一寸想像し難く候兎に角調子の整ひたる読売はなくなるならん

か扱未来は奈何」とだけあって、白鳥の解釈は読み過ぎのようでもある。かつて白鳥から苛辣な批判を受けたことのある敏はとにかく、鵬外の関心は、「青年」十三に書かれたようなところにあったと言つてよいのではないか。

この時から二昔前、『東京医事新誌』主筆の座を迫われた鵬外は、まさしく、「赫とした赤い怒り」と「緑青のやうな皮肉」を文章に現した。「キタ・セクスアリス」の発表によつて戒筋を受けた屈辱も近い。鵬外はむろん白鳥の主張に同じてはいない。しかし、言論人が言論の場を封じられる正念場に立たされていかにたたかうかは、わが身にたつて、最も強い関心事であつたにちがいない。

白鳥は、「文壇的自叙伝」(昭13・2)7『中央公論』のなかでは、「我々若輩の動静を彼等(鵬外・敏)はそんなに気にしてゐたのかと、私は呆氣あはげに取られた。」とも書いていて、鵬外の関心しんを心から意外としてゐるが(このことは、逆に、天下国家のことに無関心な白鳥の特色をよく示している)、この時期において、白鳥は、鵬外にとつて最も興味きょうみぶかい存在としてあつたと言つてよいのではないかと私は推察してゐる。

明治三十六年に読売新聞に入った白鳥は、その、齒に衣をさせない、ほとんど瀆神的な毒舌批評によつて、評判となる。文学・演劇・美術の評がかれの担当であつたわけ

あるが、さらに、当時の碩学たちにも攻撃を加え、論語・孟子・バイブルなどにも批判の矢を放つてゐる。その勢いを類えれば、『しがらみ草紙』から『めざまし草』にかけての鵬外に最も近いと言つてよさそうである。鵬外は、本来的に、ジャーナリストの才能に最も長じた人であり、異常なほどに、ジャーナリズムへの関心の強い人であつた。そういう鵬外の目に、この白鳥のめざましい活動が大寫しになつていなかつたわけではない。

鵬外より十七歳若い白鳥は、鵬外にとつて、まったく新世代の青年である。その新世代の、有力新聞をバックとする傍若無人の言説は、鵬外に一かたならぬ反応をひきおこしたようである。「青年」の最初に、ほかならぬその白鳥を拉してきて、「景仰と畏怖」の対象としたうえで、性急に否定してみせたあたりに、その反応が決して単純ではないことが察せられるのである。

鵬外は、あるいは、その白鳥のありように、おのれのあべかりし姿を思いえがいたこともあつたのではないかと、私は想像する。かれは、むかし、「舞姫」の太田豊太郎を、一旦は、ジャーナリズム——民間学の世界に置いたうえで、官界にひきあげさせた。そして、鵬外自身は、官とジャーナリズムとの両方に足を置いた。しかし、この二足のわらじは、順調には進展せず、両者の矛盾の極まつた

ところで、かれは、一度は、官途を廢する覚悟を固めるところまで行くが、しかし、結局踏みきることができず、陸軍省医務局長に就任するところまで進んで、ようやく、本格的なジャーナリズム上の活躍を再開させるといふ屈折を経てゐる。

批評家としての白鳥の強気は、若き日の鷗外のそれを彷彿させ、同時に、創作活動を兼ね、翻訳をも手がける動きも、鷗外を思わせるところがある。ジャーナリズムの内部に生きて、はばかるところなく言論活動を展開する白鳥の生きざまは、かつて、鷗外が一面であこがれつつ、ついに踏みきれなかった生の具現像と言えなくもない。そういう意味でも、鷗外は、かなり注意ぶかく白鳥の動きを見守っていたのではないか。「青年」の大石像に、かなりよく白鳥的イメージが織りこまれてゐるのは、その結果である。

その白鳥が、かつておのれが受けたとおなじ圧迫を受けていると察知したとき、鷗外のシンパシーが白鳥のうえにそそがれたのは、当然である。

社中のもの話に聞けば、あの背の低い、肥満した体を巴里為立てのフロックコオトに包んで、鋭い目の周囲に横着さうな微笑を湛へた新社主菅田男爵は、歐羅巴の某大國の Corps diplomatique で鍛へて来た社交

的技倆を逞うして、或る夜一代の名士を華族會館の食堂に羅致したのである。〔青年〕十三

この、本野一郎をモデルとした人物の叙述には、あきらかに、大石についての筆にはない毒がある。ここには、白鳥が「葬式」(明43・2『文章世界』)や「動搖」で書いた本野像の反照もあるかと思われるが、とにかく、こうした筆は、鷗外の批判の一型である。

こういうふうには、鷗外は、白鳥に身を寄せて、その反応を見守つたのであるが、「動搖」は、かれを失望させた。鷗外の言う、「何もかも自己とは交渉のないやうに」書いた、「いつもの何物に出逢つても屈折しないラヂウム光線のやうな文章」とは、次のやうな文章である。

公使は私に向つてその受持の変更を知らせた。編輯よりも執筆して君の特色を發揮して呉れたまへと命じた。私は理由を明らかにして公使の意見に逆らひ得なかつた。編輯者としての不適任は、幾年も前から自分がよく知つてゐるのである。しかし執筆者として私は何を書くんだらう、私は書くべき何物をも持つてゐない。公使は私の筆から何を予期してゐるのだらう。模範的言文一致か、家庭の説話か、文明の指導か。／私は明日は明日として、一先づ公使の命を奉じた。(「動搖」ここにゐるのは、いみじくも鷗外の言うとおりの、いつ

もながらの白鳥節である。白鳥の激昂を期待した鷗外の願いはかなえられなかった。鷗外は、この時点で、ひとまず白鳥を見切ったと言つてよいのではなからうか。

私は、鷗外が、「青年」の第八章において、純一の頭を借りて、「併し彼（大石）が何物かを有してゐるとは思はない。」と裁断したのも、この「動搖」の述懐をふまえたものではないかと思う。「青年」八が『昂』に発表されたのは、四十四年六月であり、「動搖」が『中央公論』に発表されたのは、同年四月である。鷗外が「動搖」を読んでいることは確実であり、その感慨がまだ新たな時に、この第八章は書かれていたのである。

しかし、物語の進行上、その章で読売問題をとりあげるわけにはゆかず、いぶかしさを残す結果となつたのだが、機を見て、それを補足して、裏打ちをはかつたものと思われ。鷗外らしい几張面さとも言える。この白鳥の読売新聞事件がとりあげられた「青年」十三は、四十三年十一月に発表されており、竹盛天雄氏が指摘するように（鷗外その紋様）、そこに、「大逆事件の進行を背景にした言論圧迫」に抗する意識があつたこともむろんであろうが、本筋は、やはり、この流れにおいて見るべきであらうと思ふ。

三

ここで視点を白鳥がわに移してみるならば、鷗外の、この「青年」を舞台とする批判は、白鳥には違和感の強いものであつたにちがいないと思われる。第一、白鳥は、新聞紙上における自分の仕事に重きをおいていない。さきの「動搖」からの引用文は、「私はほんの一時凌ぎに社にゐるつもりで、骨身を惜しまぬ一生の仕事は、何処か外に求めようとしてゐた。二年も三年もこの古ぼけた破れ傘の下に小さくなつてゐる気はなかつた。」とか、「世間には私が一つの主張を抱いて戦争でもする気で編輯してゐるやうに思つてゐる人もあつたが、私の心は弛み切つてその日暮しに仕事をしてゐるに過ぎなかつた。編輯の二階では一時間二時間が堪へがたきほど長く感ぜられた。」とかいう述懐の延長線にくるもので、こうした基調のうえで、「赦たる赤い怒り」などがあらわれるわけではないのである。

しかも、これが、この作品だけの負けおしみでないことは、「新聞記者は永くすべきものにてはなく、自分の大技量を養うて世間に立たねばならぬと思ひ／＼、さても月日の早い事。」という、三十七年九月づけの弟正宗敦夫あての手紙をはじめとして、白鳥の作品と回想類のすべてが、よく語つてゐるところである。

「青年」の第十三章で、鵬外は、純一になりすまして、大石のこうした「ラヂウム光線のやうな文章」に関して、「今の文壇は、愚痴といふものの外に、力の反応を見ることの出来ない程に萎弱してゐる」と総括してゐるが、しかし、こういう白鳥節を「愚痴」と見なすことは、當を得てゐるとは言えない。

「動搖」のすべてを点検しても、「愚痴」の前提となる被害者意識や不遇意識がまったくないのである。たしかに、主人公は、新聞社勤めに満足せず、ほとんどそれに倦みきつてゐる。しかし、かれは、だれからも干渉されず、やりたいようにやっていて、他人からはうらやましがられる境涯である。社主の世代交替があつて、ようやく上からの圧力が身に及んでくるのだが、編集者として適任でなく、責任を十分に果たしていないという自覚もあるから、とりわけて反発する気持はない。郷里には資産があるから、やめて困ることもない。かれは、結局は踏みきれないのだが、一度は自分から主筆に退社を申し出ている。「別に不平があるでもないし、外にいゝ仕事が見つかつたのでもないんですけれど、理由なしに厭になつたんです。……それに社の方から云つても、私を出して、もつと活版に働く人をお使ひになる方がいゝんです。」これがその理由である。主筆は、この常識離れのした理由を解することができなかった

のだが、こういう申し分を、日本語では愚痴とは言わない。のちの「文壇的自叙伝」においても、白鳥は、「慰勞金なしに追つ払ふなんて、あの時の新主筆や幹部どもは余程私を嫌つてゐたものらしい。しかし、本当はあの時やめさゝれたのは、私の将来のためによかつたので、あれで区切りがついて、否応なしに創作に努力するやうになつたのだ。」と語つていて、不満は、慰勞金がまったくなかつたことに止まつてゐる。しかも、白鳥は、別に金に困つては

いなかった。白鳥の文章の基本特徴は、否定性の貫徹にある。「動搖」においては、新聞記者生活も、その仕事も、公使であり爵位も持つ新社主（候補）も、その人の抱負も、主人公がこれまでつきあつてきた女も、友人の恋も、その恋人の芸者も、すべて、索漠たる、無意味なものとして写しだされる。そして、そういう否定性は、他者ばかりではなく、主人公である「私」をも、完全に一色につらぬくのである。「青年」十三に、大石の、自分にかかわる事柄の話しぶりが、「極端に冷静で、自分はなんの痛癢をも感ぜずに、第三者の出来事を話してゐるやうに聞える」とあるのは、そういう意味において正確である。否定性は、なんの差別もなく、自他をつらぬいてゐるのである。「私は書くべき何物をも持つてゐない。」という「動搖」の主人公の述懐は、

そういう否定性のシンボリック表現である。「公使は私の筆から何を期待してゐるのだらう。模範的言文一致か、家庭の読物か、文明の指導か。」というのは、公使に対する皮肉だが、だからといって、自分を反俗の高みに置いているわけではないのである。

この否定性を虚無と名づけるならば、白鳥の虚無のすさまじさは、自分を特別席に置くことがまったくなくところにある。白鳥の毒舌の持つふしぎなさわやかさは、自分を高みにおく毒舌は、卑しく、あと味がわるい。多くの作家は、たとえ自己否定的な言辞を弄しても、少なくとも、おのれの作品だけは聖化して残そうとする。しかし、白鳥は、たとえば、処女作「寂寞」を発表したのも、「夜具を新調したかつたためです。」（「上京当時の回想」大3・7『文章世界』など）言つてはばからない。およそ、白鳥ほど、ナルシズムと無縁の作家、おのれの作品についてさえ執着を持たない作家は、稀有だと言つてよいのである。

いまは、そういう白鳥の内面の葛藤にはたち入らないが、とにかく、白鳥の否定性の特色はそういうところにあるのであって、そういう白鳥にとっては、新聞社などは、そもそもたたかうに足る価値体ではないのであり、おのれ自身も、その負に對置される正の核ではまったくありえないの

である。この白鳥の虚無の次元では、鷗外のこたわる社会問題、国家問題などは、すべて無化されてしまふ。

こういう白鳥世界は、鷗外の評するような「萎弱」の結果の出現物ではなく、まったく逆に、無の認識に堪える強靱な精神に支えられた新しい出現物なのであって、それはまた、強烈なエネルギーを放射するのであるが、鷗外は、その辺の事情は解しかねたようである。少なくともこの時点においては。そして、自分がかつて、『東京医事新誌』から『衛生療病志』にかけて、実験医学の理想をかかげて果敢にたたかったように、いや、それは所詮時代錯誤としても、なんらかのかたちで、白鳥が、自己を固く守つてたかかうことを期待して、失望したのである。

そこには、白鳥・鷗外の自己意識の基本的なちがいが作用していたと思われる。

「青年」には、鷗外自身を稚拙にパロディ化した鷗村なる人物が、間接的に二度登場するが、二度目は、拊石講演会の人々の噂のなかに出てくる。「厭味だと云はれるのが気になる」と見えて、自分で厭味だと書いて、その書いたのを厭味だと云はれてゐるなんぞは、随分みじめだね。」といったふうなコメントがつけ加えられる。

自分の世間から受けた評について彼此云へば、馬鹿に

せられるか、厭味と思はれるかに極まつてゐる。そんな事を敢てする人はおめでたいかも知れない。厭味なのかも知れない。それとも実際無頓着に自己を客観してゐるのかも知れない。それを心理的に判断することは、性格を知らないでは出来ない筈だと思つた。

どうせパロディ化されている部分なのだから、噂だけで放りだしておけばいいのに、こんなにまともに弁明されると、すっかりしらけてしまうのだが、こういう弁明をせざるにいられないのがすなわち鵬外なのである。かれは、たとえ冗談にでも、自己を傷つけることに堪えることができないのである。こういう自己意識は、「世間には私が一つの主張を抱いて戦争でもする気で編集してゐるやうに思つてゐる人もあつたが、私の心は弛み切つてその日暮しに仕事をしてゐるに過ぎなかつた。」などと平気で書く白鳥の自己意識とは、まったく対極的だと言つてよいだらう。おのれを高く持さずにはいられない鵬外には、こういう白鳥は、詮ずるところ、愚痴、退嬰、消極としか映らなかつたようである。

こうして、鵬外は、純一をして、景仰してきた、因襲の徹底的破壊者大石を、それ以上の何物をも持たない消極的新人と認定させて、そこから、次のステップへ旅立たせる。拊石は、その純一に、古い繫縛を破つて、新しい「何物」

かを求める積極的新人——永遠の希求者のイメージをあたえる。この場合、その何物か——理想は、時間の軸にそつて、無限に繰り延べられてゆく。一旦つかまえられた何物かも、時間の経過によって、たちまち古き繫縛と化してゆく。

それでは安心立命はできないと純一に説くのは、大村莊之助である。時間を超えなければ安心立命は得られない。しかし、彼岸に行つてしまつてはならない。内に安心立命を得て、外に十分の勢力を施さなければならぬ。そのためにはどうしたらいいか。現在に立脚しつゝ、過去の価値を領略し、さらに進んで万有を領略する道がある。利他主義から個人主義へは、逆転できない時代の流れである。しかし、利他主義と対立するのではなく、個人主義の立場を堅持しつゝ、忠義や孝行などの過去の徳目をもわが有として再生させる。そうすれば、個人主義は利他的個人主義になる。そういうふうにして、生があらゆる価値を領略してしまえば、個人主義即万有主義になる。個人は死ぬる。

「どうだらう、君、かう云ふ議論は。」と、大村は言う。枝葉を払い、また、多少のつかい棒も立ててはいるのだが、純一が、大石から別れたあとにたどる理筋は、以上のようなものである。

理の筋道としては、いかにも鵬外流に明晰であり、また、

納得もできる。さらに、大村の理論に、竹盛天雄氏の指摘するような『森鷗外 その紋様』、思想弾圧の御時勢から、個人主義を無政府主義と切り放して救済しようとする戦略的モチーフが認められることも確実であり、しかも、それが、単なる対外戦略に止まらず、時事の要求に誠実に対応しつつ、しかし、精神の自由は確保して、一歩も仮借すまいとする、官僚鷗外年来の祈念に深く結びついている点において、この大村理論の、鷗外主体におけるモチーフ上の切実性も、理解することができる。

しかし、にもかかわらず、大村理論を読みおわった後の一種の空虚感をいかんともすることができない。思うに、それは、この理論がもつばら概念的なことばだけによつて完結していることによるのであろう。たとえば「利他的個人主義」ということばだが、いかにももつともらしく聞こえるものの、その内実を具体的につめようとすると、途方もない困難が待ちかまえている。鷗外自身、やがて、そのことを、歴史小説のうえでいやというほど思い知るはずである。しかし、そういうことばが、ここでは、いかにもしたり顔にやすやすと繰り出されているのである。さらに、「生が万有を領略してしまへば、」などという仮定が、たとえ純粋な仮定としても、安易に口をついて出てくるようなオプティミズムそのものが、この言説の全体を空虚なも

のにしてしまふのである。

純一は、大石と別れてのち、所詮、ことばの旅、概念の旅をしたにすぎない。少年純一がそれで満足したとしてもとがめることはないが、作者鷗外がそれで満足したとすれば、問題であろう、むしろ、純一は、別の体験の旅もしている。しかし、その体験の旅と、このことばの旅とは、うまくかみあっていない。作者は、最後に、純一に、伝説の現代化をこころみる決意をさせることで、両者を強引にかみあわせようと企ててはいるのだが、それは成功していない。作者自身、不満足ながらむりに終結をはかったもののように、**「鷗外云。小説『青年』は一応これで終とする。書かうと企てた事の一小部分しかまだ書かず、物語の上の口数が六七十日になつたに過ぎない。……兎に角一応これで終とする。」**という未練気なあとがきをつけて、作品を閉じる。四十四年八月のことである。

鷗外はいらだっている。大石から後の純一のことばの旅の虚妄性にも、多分もう気がついている。大石からやりなおさなければならぬ。あの虚無をポジティブに徹底させたらいつたいていどうなるか。古い家のなかで、官僚社会のなかで屈曲してきた鷗外内部の否定性が、うごめきはじめる。こうして、大石路花は、「灰焔」の山口節藏として再生する。

山口節藏は、白鳥というよりも、白鳥創造するところの「何処へ」の菅沼健次に近い。さらには、白鳥が震駭的な影響を受けたレールモントフのペチョーリンに近い。後者の場合、その白鳥の身心を震わせたのは、ほかならぬ鷗外の息のかかった小金井喜美子訳・レールモントフ「浴泉記」(明25・10く27・6『しがらみ草紙』)である。こういう因縁を持つ再生大石路花は、いったい「何処へ」行くか。それは次の話題である。

——広島大学文学部教授——